

福岡市埋蔵文化財調査報告書第858集

# 比 恵 41

— 比恵遺跡群第90次調査の概要 —

2 0 0 5

福岡市教育委員会



# 比 恵 41

— 比恵遺跡群第90次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第858集

2005

福岡市教育委員会

## 序 文

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には豊かな自然と多くの遺跡が残されています。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな生活環境を作り出しています。私たちはこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、さまざまな形で遺跡の保護・活用に取り組んでいます。

その一方で、最近の都市の発展により新しい開発事業が数多く手がけられ、そのために重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。本市ではこれらの遺跡については事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は博多区博多駅南四丁目地内における比恵遺跡群第90次調査の成果を報告するものです。この調査により、弥生時代前期から中期にかけての集落を確認することができ、この地域での新たな資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料として御活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの御協力を頂いた、株式会社本多産建をはじめとする関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

## 例 言

1. 本書は共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が平成16年1月21日から平成16年3月5日にかけて行った比恵遺跡群第90次調査の調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成、写真撮影、挿図の整図は大塚紀宜が行った。
3. 本書で用いた座標は国土座標第Ⅱ系を使用している。本書で用いた方位は座標北で、真北から0°19′西偏する。
4. 本書で使用した遺構の呼称は、住居址をSC、溝状遺構をSD、土坑をSK、柱穴・ピットをSPと略号化している。
8. 遺構・遺物番号は基本的に各々通し番号で、重複はない。
9. 本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10. 本書の執筆・編集は大塚が行った。

## 目 次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の組織	1
第2章 調査の記録	2
1. 調査概要	2
2. 検出遺構・出土遺物	2
(1) 溝状遺構	2
(2) 竪穴住居	3
(3) 貯蔵穴	7
(4) 土坑	11
(5) 石器・石製品・土製品	14
第3章 小結	14

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

2003年（平成15年）10月21日付けで、株式会社本多産建 代表取締役社長大園弘毅氏より福岡市博多区博多駅南4丁目222番地内における共同住宅建設にともなう埋蔵文化財事前審査願が申請された。これをうけて埋蔵文化財課では申請地が周知の遺跡である比恵遺跡群の範囲内に位置するから、同年11月13日に試掘調査を実施した。その結果、同地内で弥生時代から古墳時代の遺構が遺存していることを確認した。この結果をもとに埋蔵文化財課では関係者と協議を重ねた結果、建物の建築予定部分については建物基礎が遺構面に影響を与えることから、この部分について発掘調査による記録保存を図ることとし、平成16年1月から3月にかけて発掘調査を実施した。

調査は1月21日より南東側部分を先行して重機による表土除去を開始し、1月23日にかけて作業員による遺構検出、遺構掘削を行い、2月13日、14日に重機による廃土反転、2月16日から3月3日まで調査区北西側部分で人力による遺構検出、遺構掘削を行い、3月5日に調査区を埋め戻し、終了した。

発掘調査の実施にあたっては、株式会社本多産建をはじめ関係者の方々に多大な御理解と御協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

## 2. 発掘調査の組織

事業主体 株式会社本多産建  
調査主体 福岡市教育委員会  
調査総括 埋蔵文化財課 課長 山崎純男（平成15年度）  
山口譲治（平成16年度）  
庶務担当 文化財整備課 御手洗清  
事前審査 埋蔵文化財課事前審査係 米倉秀紀 久住猛雄（平成15年度）  
調査担当 埋蔵文化財課調査第2係 大塚紀宜

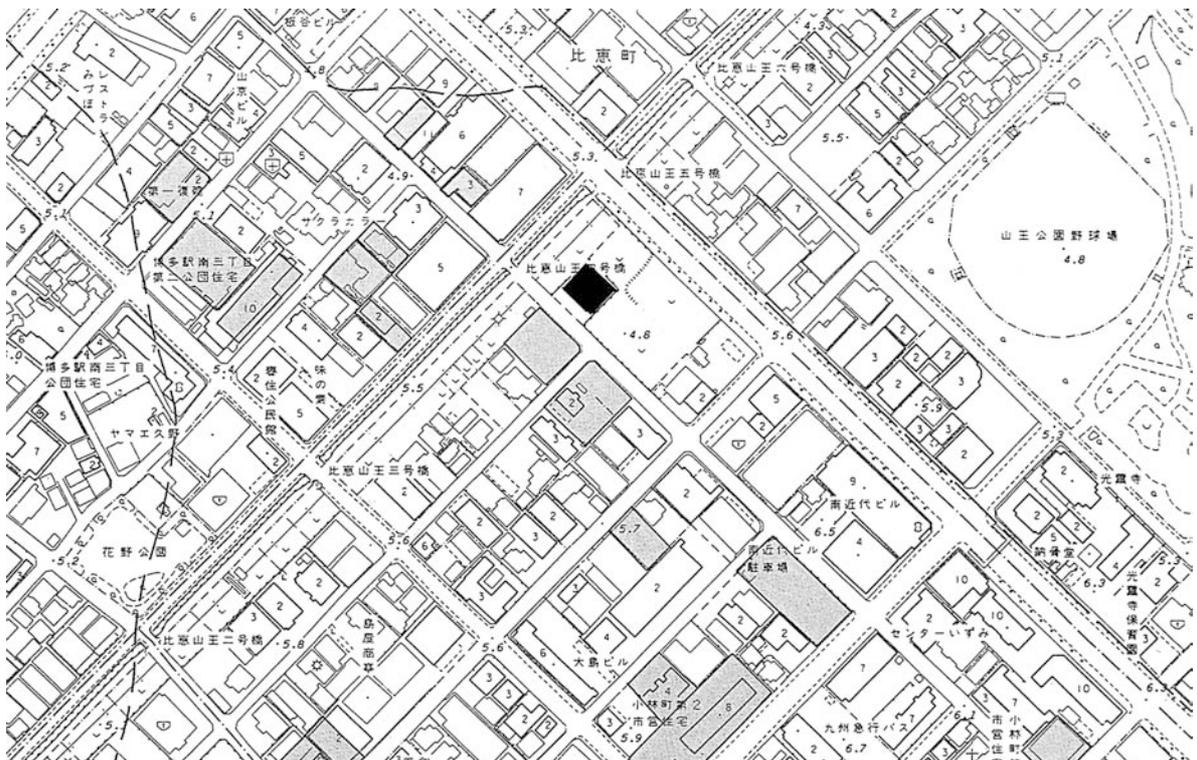


Fig.1 調査区位置図 (1/4000)

## 第2章 調査の記録

### 1. 調査概要

調査地点は福岡市博多区博多駅南4丁目222番に位置する。調査面積は332.1㎡である。

調査地点は比恵遺跡群全体の北側部分に位置し、旧況は水田・畑地で現在は60cmほど盛土造成を行う。現況の標高は約5.6mである。

遺構は盛土下の明褐色ローム層上面で検出された。検出された遺構は、溝状遺構、円形竪穴住居、貯蔵穴、土坑・祭祀土坑、ピットである。遺構の時期は貯蔵穴・住居は弥生時代前期、祭祀土坑は弥生時代中期、溝状遺構は弥生時代から古墳時代にかけてと考えられる。出土遺物は弥生土器・石器などで、土器は風化が進み、表面の剥落や摩滅が著しい。

### 2. 検出遺構・出土遺物

#### (1) 溝状遺構 (Fig. 3・4)

**SD-01** 調査区北側で検出された溝で北西-南東方向に延びる。検出時の幅は50~70cm、深さは30cm程で断面形はU字形を呈する。溝底レベルは北端で標高4.7m、南端で4.5mでわずかに南に下がる。覆土中に細砂層があり、水が流れていた痕跡がある。出土遺物はいずれも小片で、摩滅したものが多く、図示可能なものはない。弥生土器・土器破片が含まれているが、器形など詳細は不明。

**SD-02** 調査区南側で検出された幅広の溝状遺構で、溝の方向は北東-南西方向で南東側は調査区外に延びる。検出時の幅は2.5mで、断面は二段掘り状で溝底までの深さは25cmである。床面には細かい凹凸がみられる。覆土下層には暗褐色の鉄分沈殿部分がある。遺構内からは弥生土器小片のほか、

染付破片が出土している。遺構は近世の掘削とみられる。

**SD-04** 調査区東端で検出された遺構で、完掘して溝状遺構と確認できた。東側の肩は調査区外になるが、溝幅は約1.5mと推定される。断面は二段掘り状で、下段の溝は溝底レベル標高4.3m、幅60~80cmで、床面上には流水痕跡のような細かい凹凸がみられる。上段の溝は溝底レベル標高4.5mで、溝床面上に灰色粘土が薄く堆積しており、度々水が溜まる状態だったとみられる。遺構内からは弥生土器が出土した。小片が多く、摩滅も進む。

**SD-10** 調査区東側で検出された溝で、南北方向に延びる。検出時の幅は50~60cm、深さは

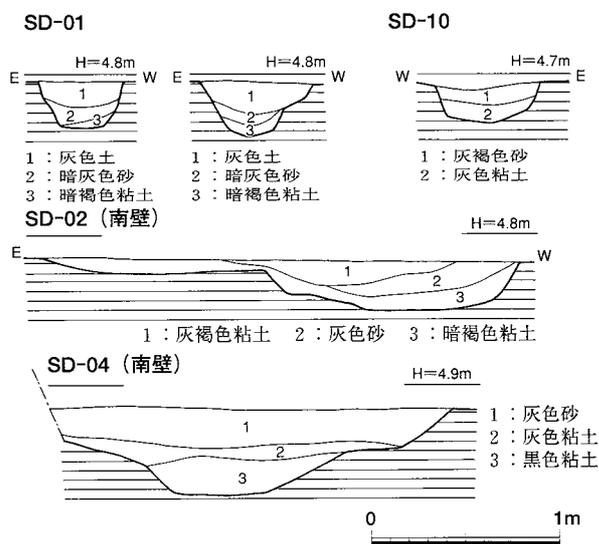


Fig. 2 SD-01・02・04・10土層断面図 (1/40)

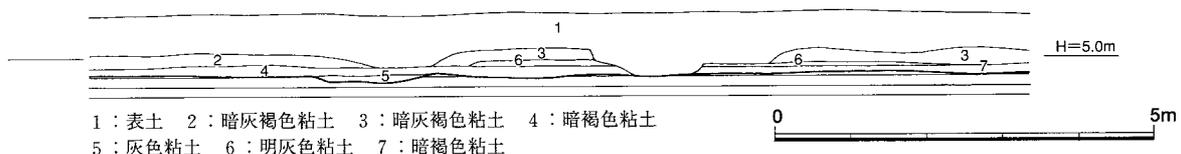


Fig. 3 調査区北西壁面土層図 (1/100)

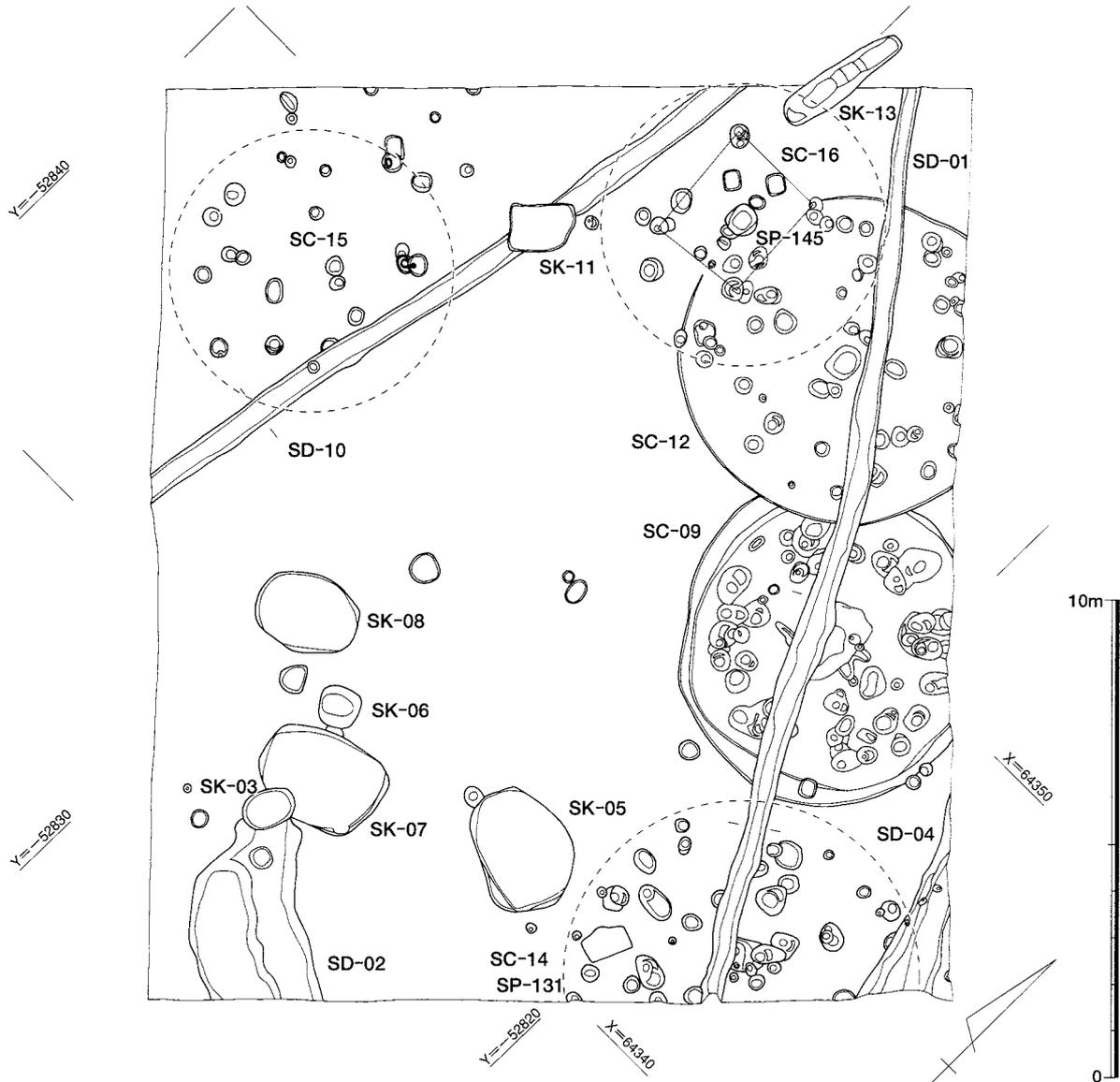


Fig. 4 調査区全体図 (1/150)

20cmで、断面形は浅いU字形を呈する。溝底レベルは標高4.6mで、南北通じてほぼ同一レベルである。覆土中に灰色細砂層があり、水が流れていた可能性もある。SD-10の方向は、SC-09・12・15の中央土坑主軸やSK-13の主軸とほぼ同じ方向である。遺構内からは弥生土器・土師器破片が検出されている。出土した遺物はいずれも小片で、図示可能なものはない。

## (2) 竪穴住居

**SC-09** (Fig. 5・6) 調査区北西側で検出された円形の竪穴住居で、中央部をSD-01に切られる。また北側をSC-12に切られる。検出した段階では一軒の住居とみられたが、床面まで掘り下げると内側にもう1軒の円形の掘方を検出し、2軒以上の建て替えであることが判明した。土層の堆積状況では上層の住居が新しくなる。

上層の住居は検出時の壁高5cmで、相当の削平を受けている。主柱穴は6本で、住居中央には中央土坑がある。中央土坑の覆土は黒色粘土で炭化物・焼土を多く含み、炉としての機能を想定させる。中央土坑周囲の床面にも炭化物が集中する部分がある。床面からの柱穴の深さは50~70cm。床面は

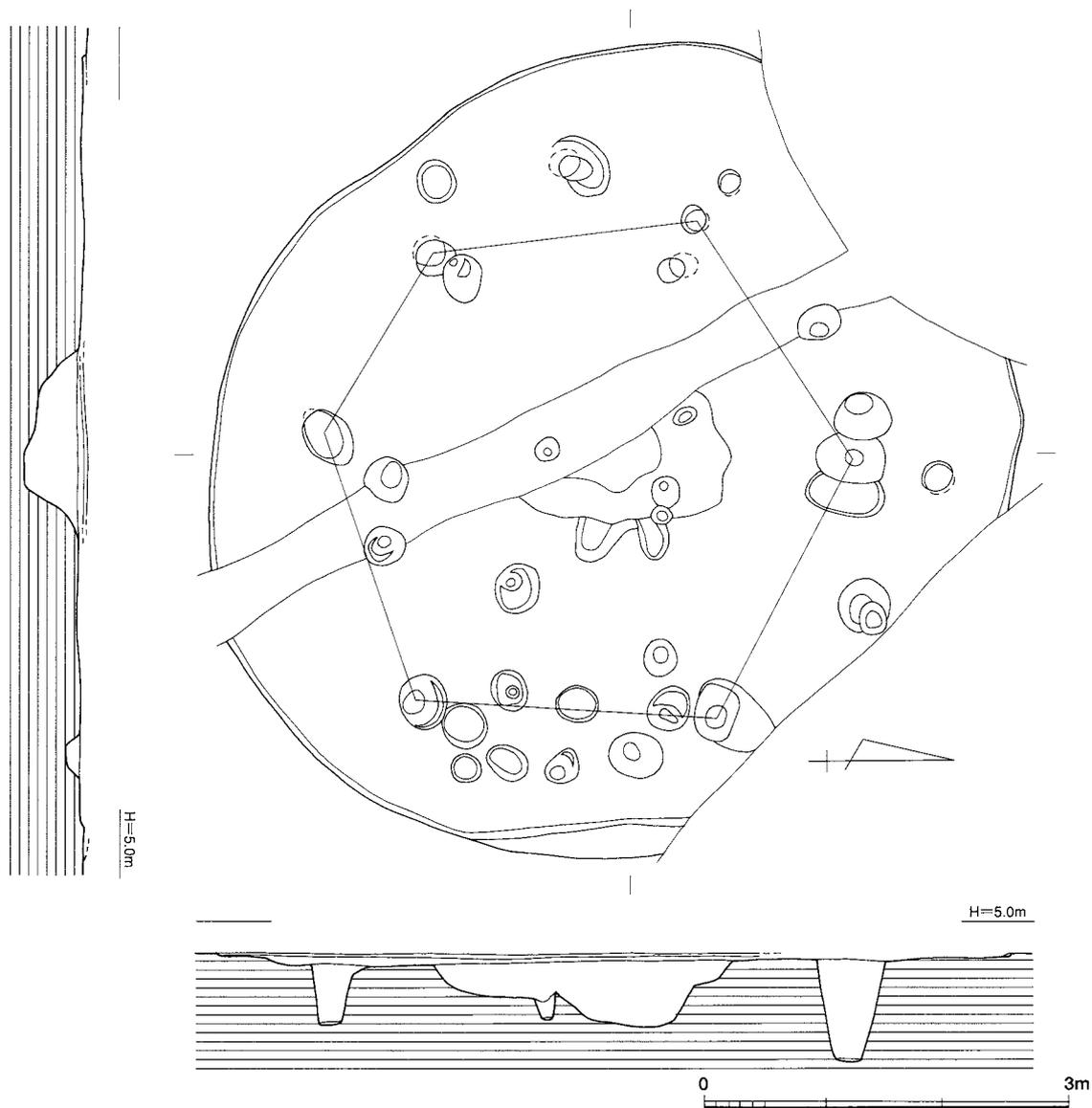


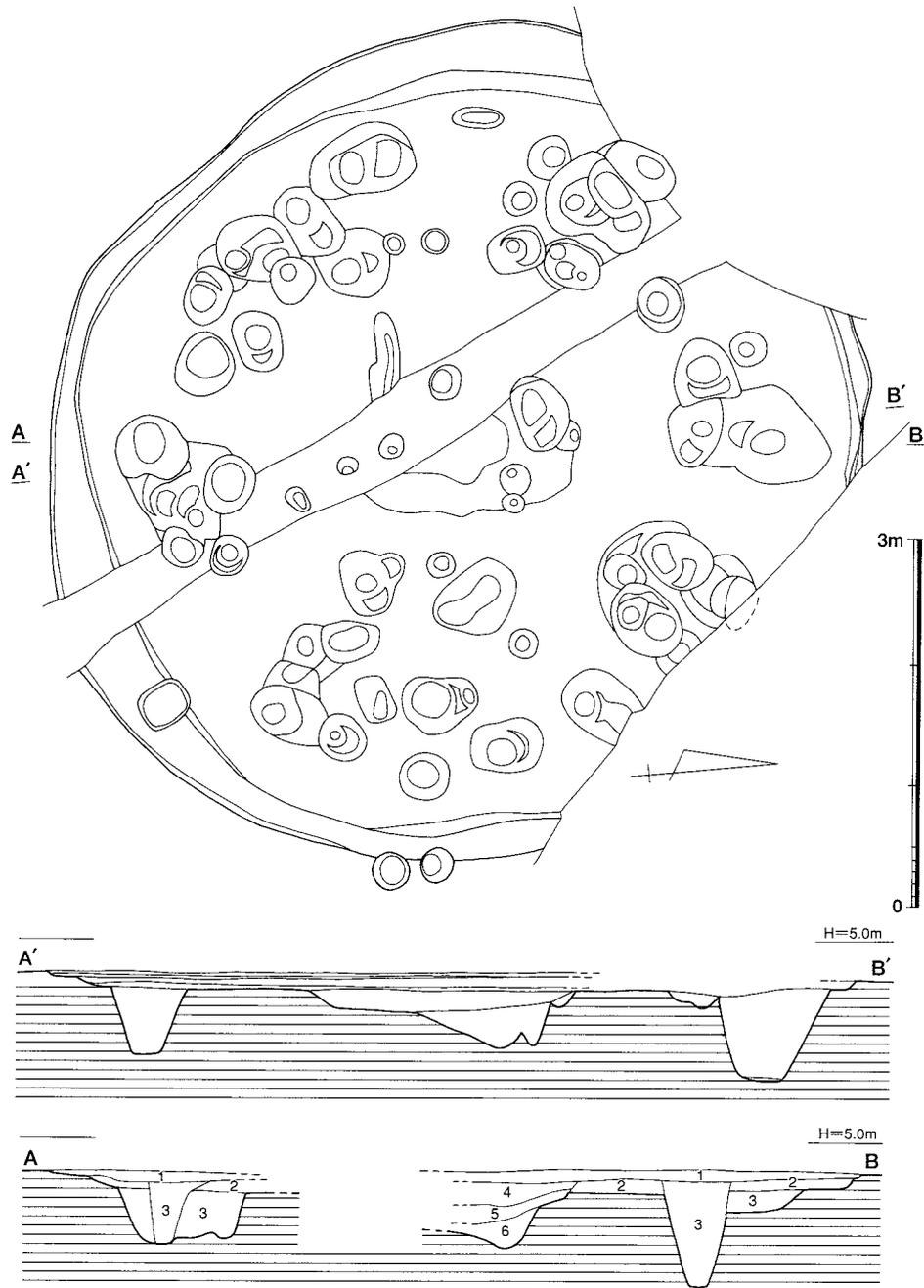
Fig. 5 SC-09 (上層) 遺構実測図 (1/60)

平坦で、全体にわたる張り床は認められないが、下層の住居の埋め土が張り床と同義といえる。

下層の住居は上層床面からさらに10cm程度掘り込んでおり、平面形は上層の住居より一回り小さい直径をもち、上下の住居とも中央土坑を共通していたと思われる。床面からの柱穴の深さは50～80cmで、多数の柱穴が切り合っており、1回の建て替えで使用した柱穴数や建て替えの回数は不明である。位置関係を見ると柱穴群は6群にグルーピングでき、同一位置での連続的な建て替えが行われていた可能性が極めて高い。柱穴覆土は暗褐色土に暗黄褐色土ブロックや黒色土ブロックが含まれ、自然埋没ではなく人為的な埋め戻しが行われている。

上下層の住居内から出土した遺物はいずれも小片で、図示困難なものばかりである。胎土や器壁厚さなどから見て弥生時代中期の遺物が多いと感じられる。底面から木質が検出された柱穴があり、柱材か礎板とみられる。木質はかなり脆くなり、原型を留めない。

**SC-12** (Fig. 7) 調査区北側で検出された円形の竪穴住居。SC-09より一回り大型で、形状も真円に近い。検出時の壁高は3～7cmで西側の一部は壁が認められず、相当の削平を受けていることが想



1：黒色粘土 2：黒色粘土＋暗褐色土ブロック＋明黄褐色土ブロック 3：黒色粘土＋暗褐色土ブロック  
 4：黒褐色土（炭化物多い） 5：黒褐色土（炭化物多い） 6：暗灰褐色土

Fig. 6 SC-09（下層）遺構実測図（1/60）

定される。中央土坑は長さ72cm、幅60cmで、覆土は暗黒褐色粘土で炭化物の混入は少ない。中央土坑の両側に2対の柱穴があり、それぞれを主軸とする支柱穴が二重に回っている。外側の支柱穴は8本で壁から50～80cm離れた位置で回る。内側の支柱穴は6本で壁から1.2～1.4m離れた位置で回る。この2つの支柱穴群は併存するものではなく、建て替えの際に異なった上屋構造とした所以と考えられる。遺構内から出土した遺物は小片で図示不能。SC-09と同様に弥生中期の土器片が多い。

**SC-14** (Fig. 8) 調査区東側で検出された柱穴群が円形の範囲に集中するため、円形堅穴住居が削平されて柱穴だけ遺存した痕跡であると推測され、住居遺構を想定してこれをSC-14とする。住居の

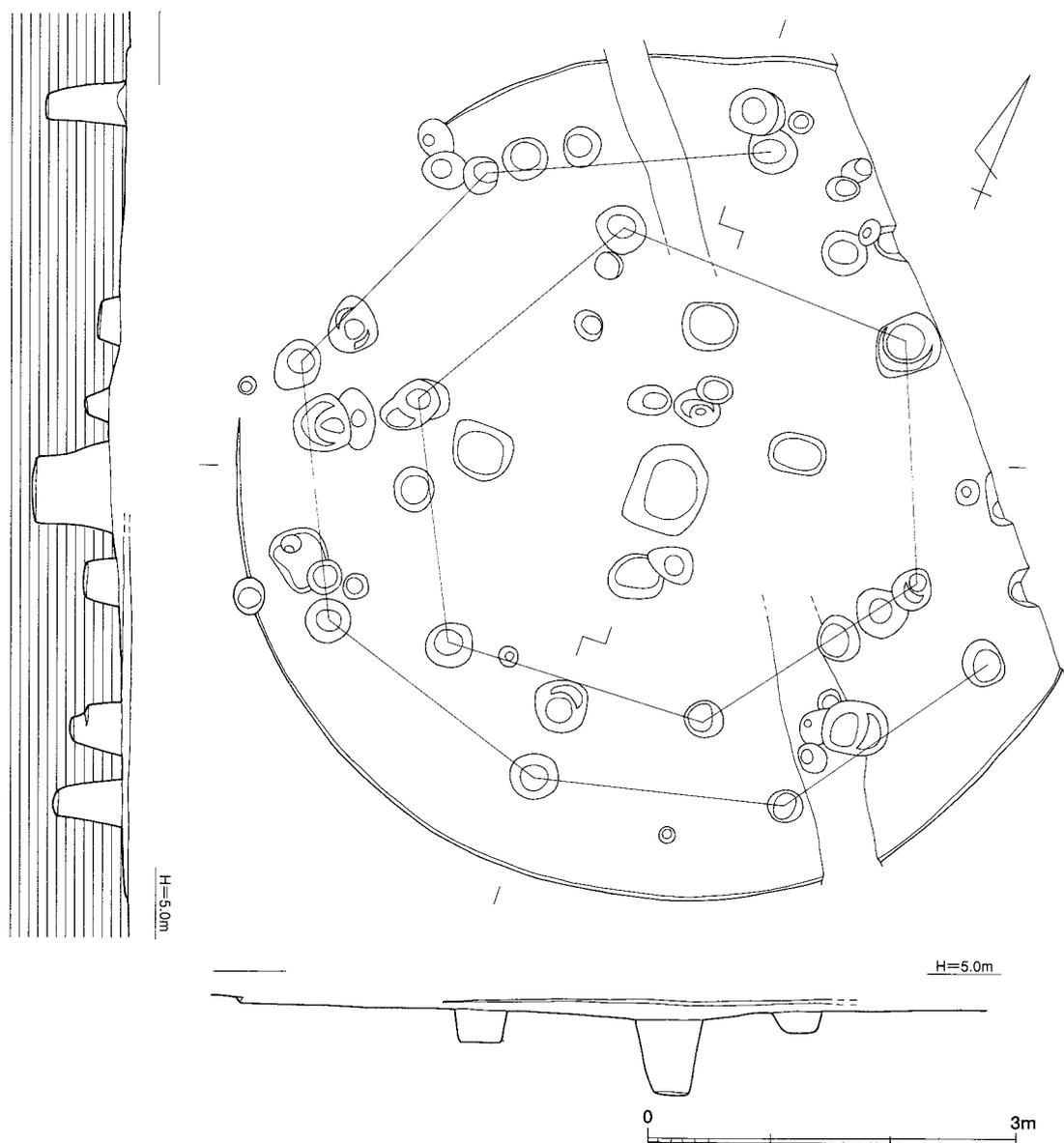


Fig. 7 SC-12遺構実測図 (1/60)

直径は7.5m前後で、中央部付近にやや大きめの掘り込みがあり、中央土坑に該当するとみられる。柱穴の配置から6～8本柱の主柱穴が想定される。

各柱穴からの出土遺物は、いずれも小片で図示不能。弥生土器の破片であろう。

**SC-15** (Fig. 4) 調査区東側で検出された柱穴群が円形の範囲に集中するため、円形竪穴住居が削平されて柱穴だけ遺存した痕跡であると推測され、これをSC-15とする。検出面からの柱穴の深さは20～40cmで、相当の削平を受け、中央土坑の痕跡もない。想定される住居の直径は6.5m程度である。

各柱穴からの出土遺物は、いずれも小片で図示不能。弥生土器とみられる。また底面から木質が検出された柱穴があるが、かなり脆く、取り上げることはできなかった。

**SC-16** (Fig. 4) SC-12西側に柱穴が集中する部分があり、住居の可能性があるためこれをSC-15とする。中央土坑はSP-145で、中央土坑の両側に柱穴が位置する。主柱穴は4本で中央土坑を方形に囲む。柱穴の深さは50～60cmで中央土坑の深さは40cm。各柱穴から弥生土器の小片が出土する。

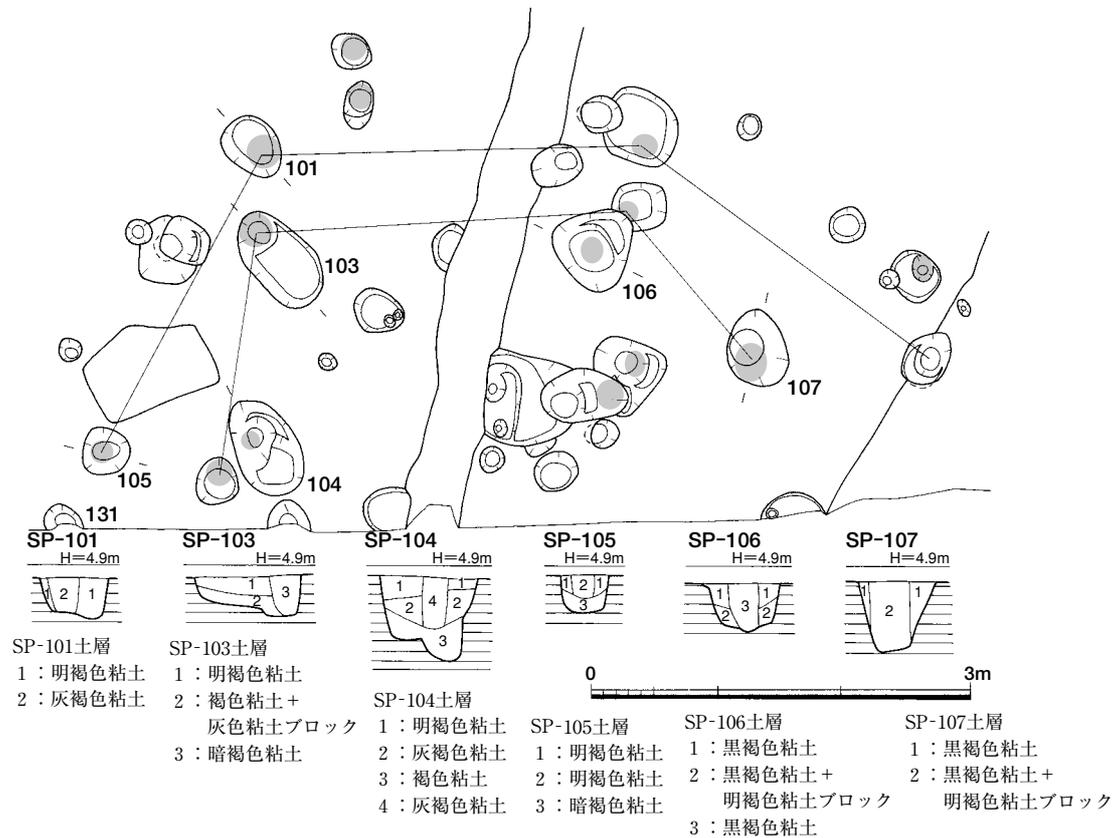


Fig. 8 SC-14遺構実測図 (1/60)

(3) 貯蔵穴

SK-05 (Fig. 9) 調査区南東側で検出された貯蔵穴。平面形は楕円形を呈する。床面は平坦で、壁面はオーバーハング気味に立ち上がる。覆土をみると下層に黒色土が堆積し、上層に明褐色土の大ブロックが落ち込んでいる。これは本来の上部がかなりすぼまり、埋没時に天井が崩落したものと想定できる。遺物は床面直上での検出量は少なく、ある程度埋没した段階で流れ込んだものとみられる。

出土遺物 (Fig. 10・11) 1～9は壺。1は胴部が張り出し、頸部が緩く締まって口縁部が外反するもの。外面頸部下は縦ハケ、胴部は横ミガキ。内面は頸部と胴部の境界付近に成型時の指圧痕が多数残る。2・3は大型壺底部破片。4は外面に貝殻で重弧文を施文する。5～9は頸部-胴部境界破片で、いずれも突帯や沈線をもつ。10～24は甕。12は鉢に近い器形で外面は横ミガキ。15・16は内外面や口縁端部に横ミガキを施す。18は亀の甲タイプで、断面三角形口縁

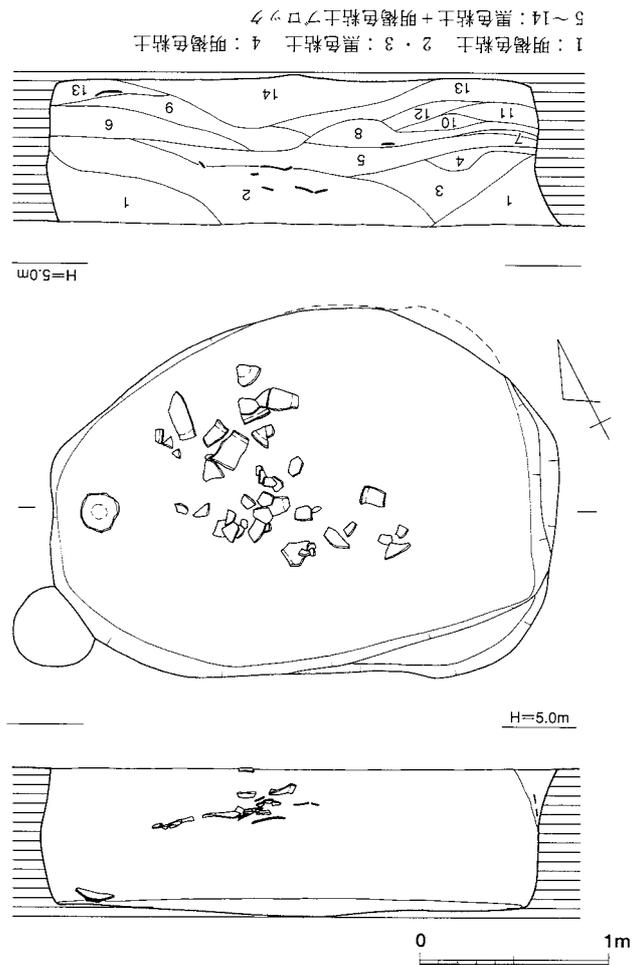


Fig. 9 SK-05遺構実測図 (1/40)

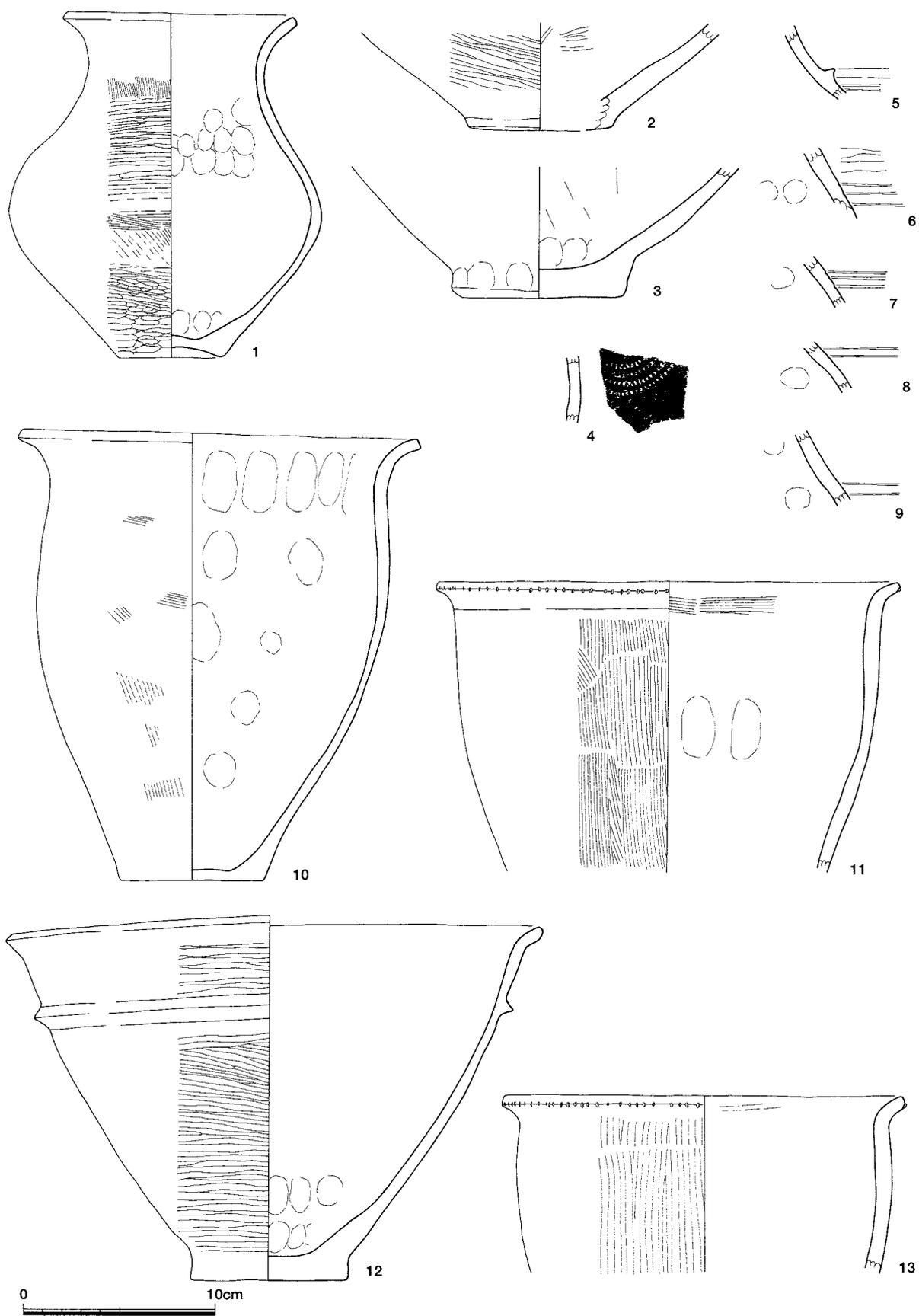


Fig. 10 SK-05出土遺物実測図1 (1/3)

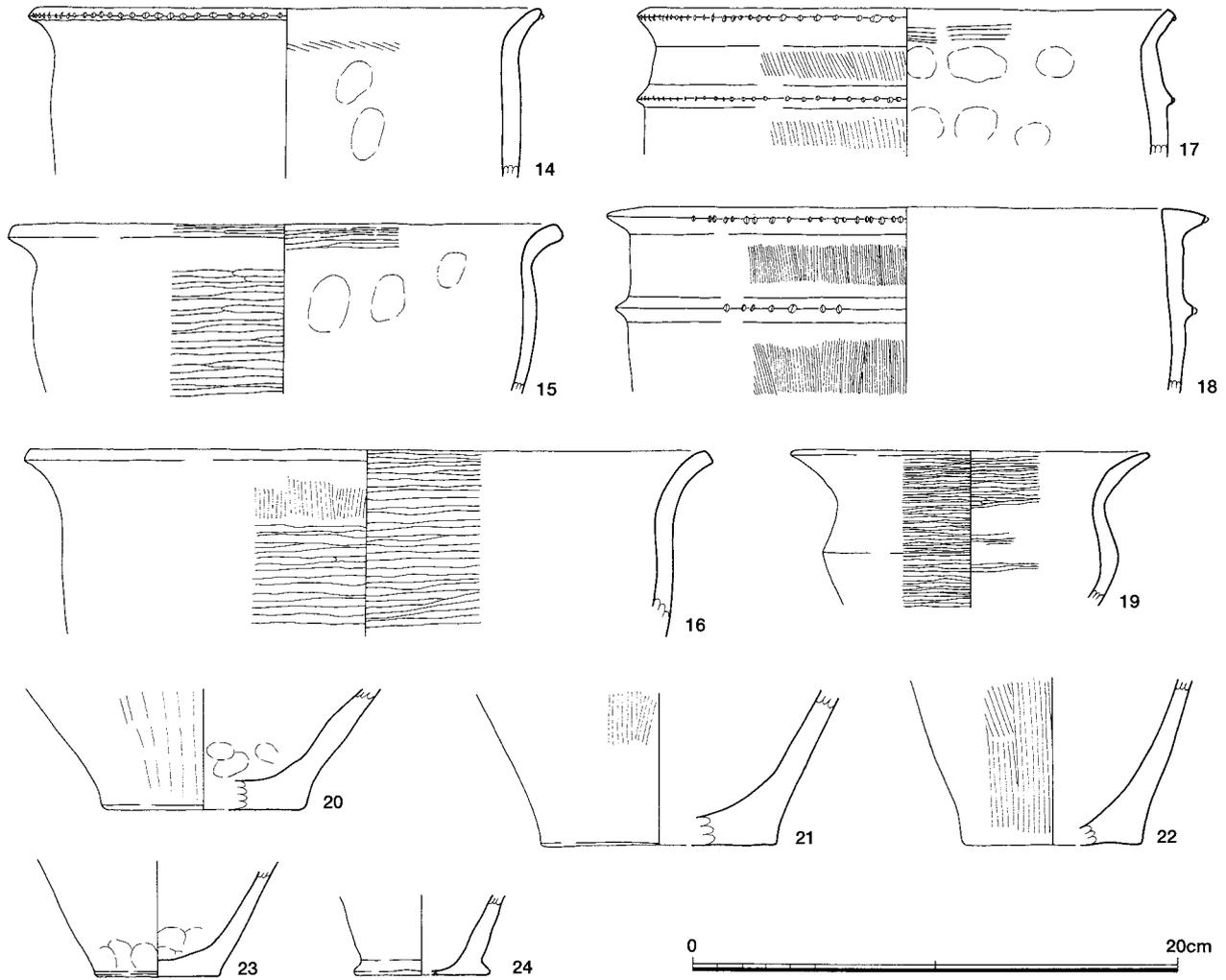


Fig. 11 SK-05出土遺物実測図2 (1/3)

と刻目突帯をもつ。19は口縁が大きく開き、胴部が張る。24は底部端部が張り出し、全体に整わない形態である。

出土遺物はいずれも板付Ⅱb式の範疇に収まる。遺構の埋没時期もこの時期であろう。SK-07 (Fig. 12) 調査区南側で検出された貯蔵穴。平面形は隅丸長方形で、壁面は直立する。南東隅に狸穴が掘られており、貯蔵穴が廃棄された後に掘られたものである。覆土は北から南に流れ込んで堆積しており、土器の出土レベルも北側から放射状に流れて

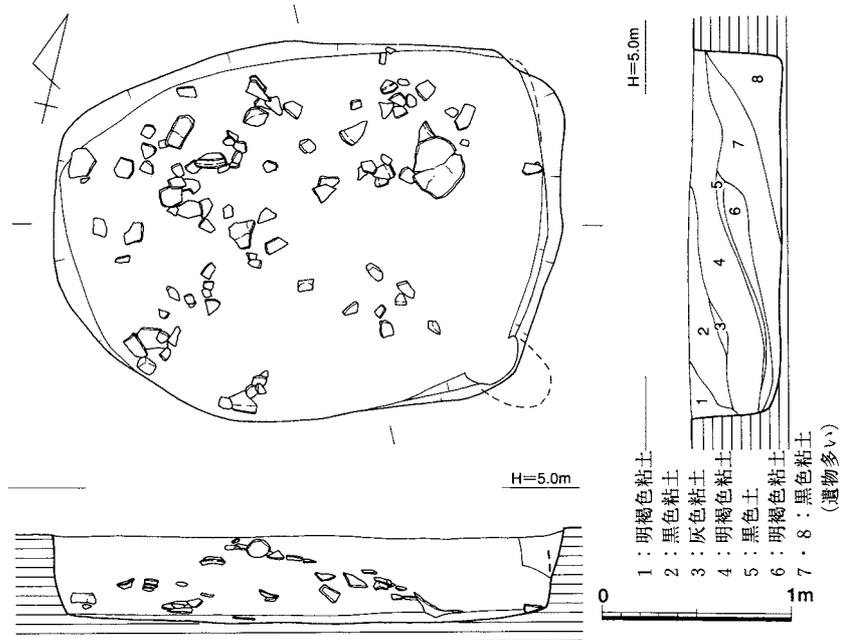


Fig. 12 SK-07遺構実測図 (1/40)

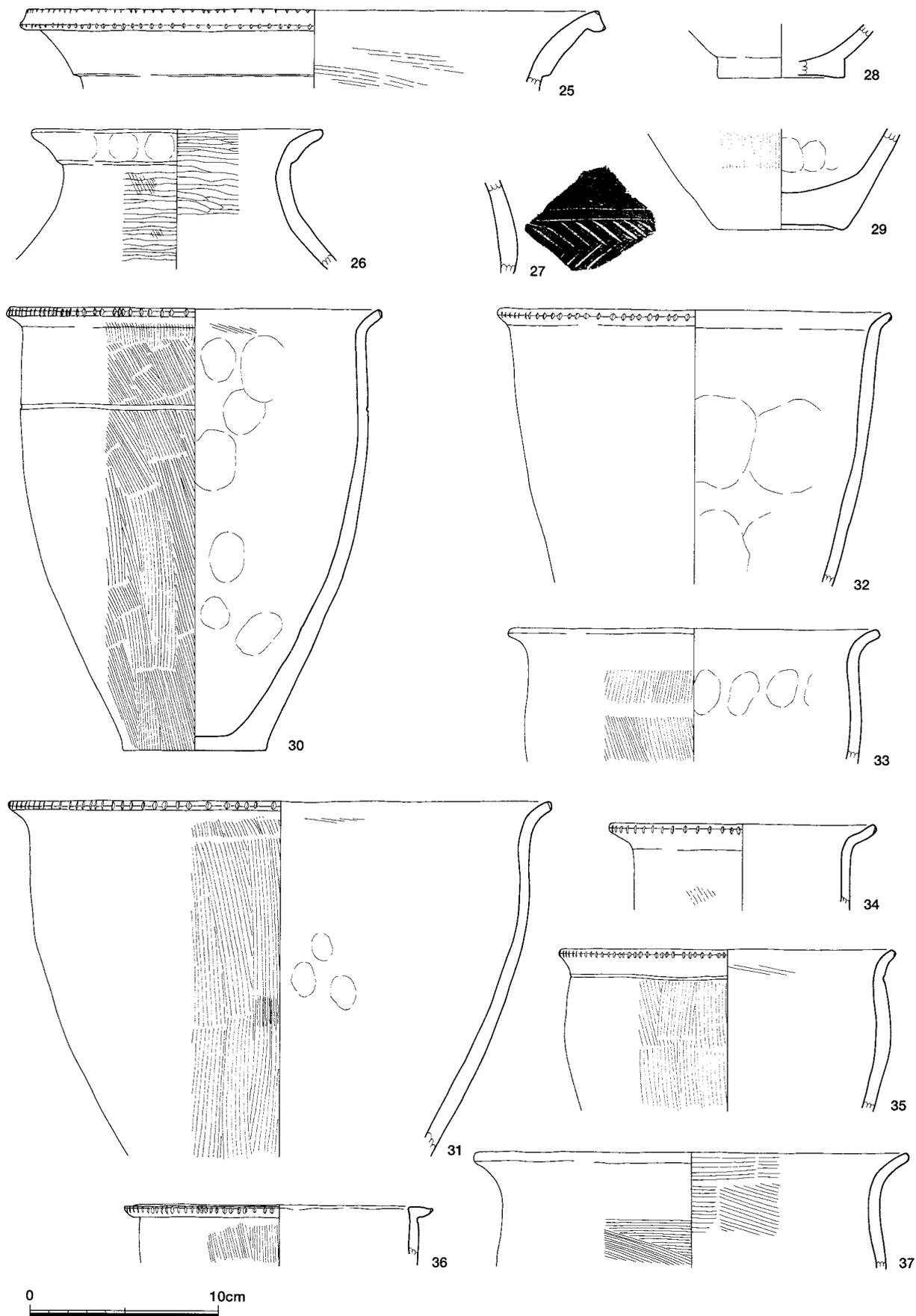


Fig. 13 SK-07出土遺物実測図1 (1/3)

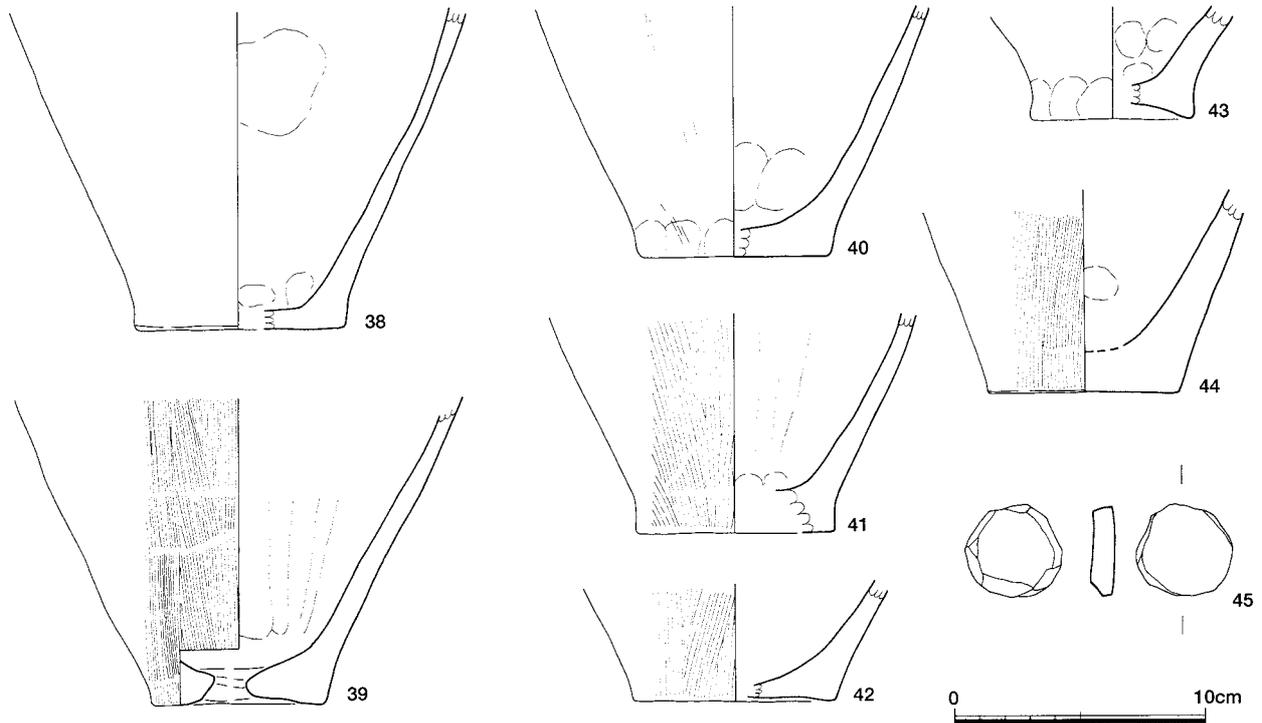


Fig. 14 SK-07出土遺物実測図2 (1/3)

いる。このことから北側中央部に貯蔵穴の出入口があったと想定できる。

出土遺物 (Fig. 13・14) 25~29は壺。25は大型で口縁両端に刻目をもつ。26は口縁外面を肥厚させ、指圧痕が残る。30~44は甕。30は口唇部全面刻目で外面にヘラ描き沈線がまわる。36は断面三角形口縁で1個体のみ出土し、他は全て如意状口縁である。

32~37は他個体よりもやや新出の様相を呈する。39は底部に穿孔がある。底部の作りはやや古め。45は土製円盤で、甕破片からの転用である。

**SK-08** (Fig. 15) 調査区南西側で検出された貯蔵穴。平面形は楕円形で、壁面は直立し一部オーバーハングする。床面には細かい凹凸が見られる。覆土は下層が黒色粘土で、上層は明褐色粘土となっており、埋没過程のかなり早い段階で天井が崩落したと考えられる。遺構内からは、黒色粘土内から土器小片が出土しているが、量が少なく、図示できる遺物はない。

#### (4) 土坑

**SK-03** (Fig. 17) 平面形は楕円形、断面は皿形を呈する。覆土は暗褐色粘土で黒色土を若干含み、締まりがない。比較的最近の遺構とみられる。

**SK-06** (Fig. 17) 平面形は楕円形、断面は箱形を呈する。覆土は暗褐色粘土で明褐色土ブロックを含む。遺構内から弥生土器の小片が出土する。

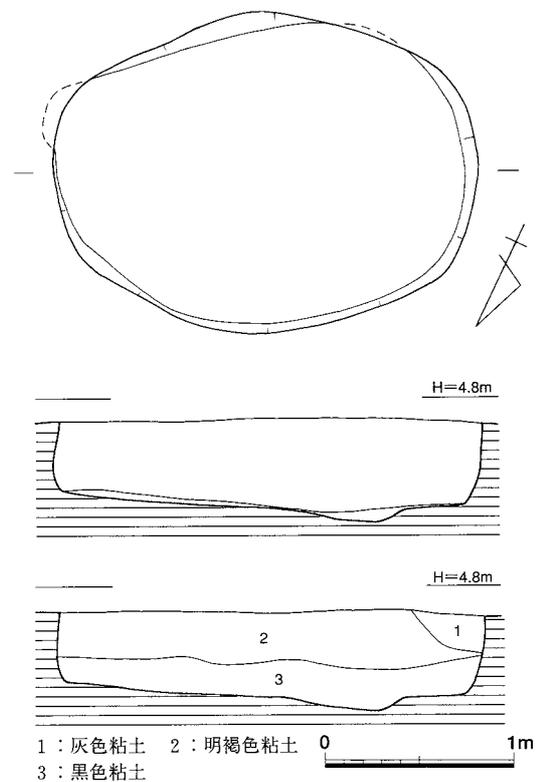


Fig. 15 SK-08遺構実測図 (1/40)

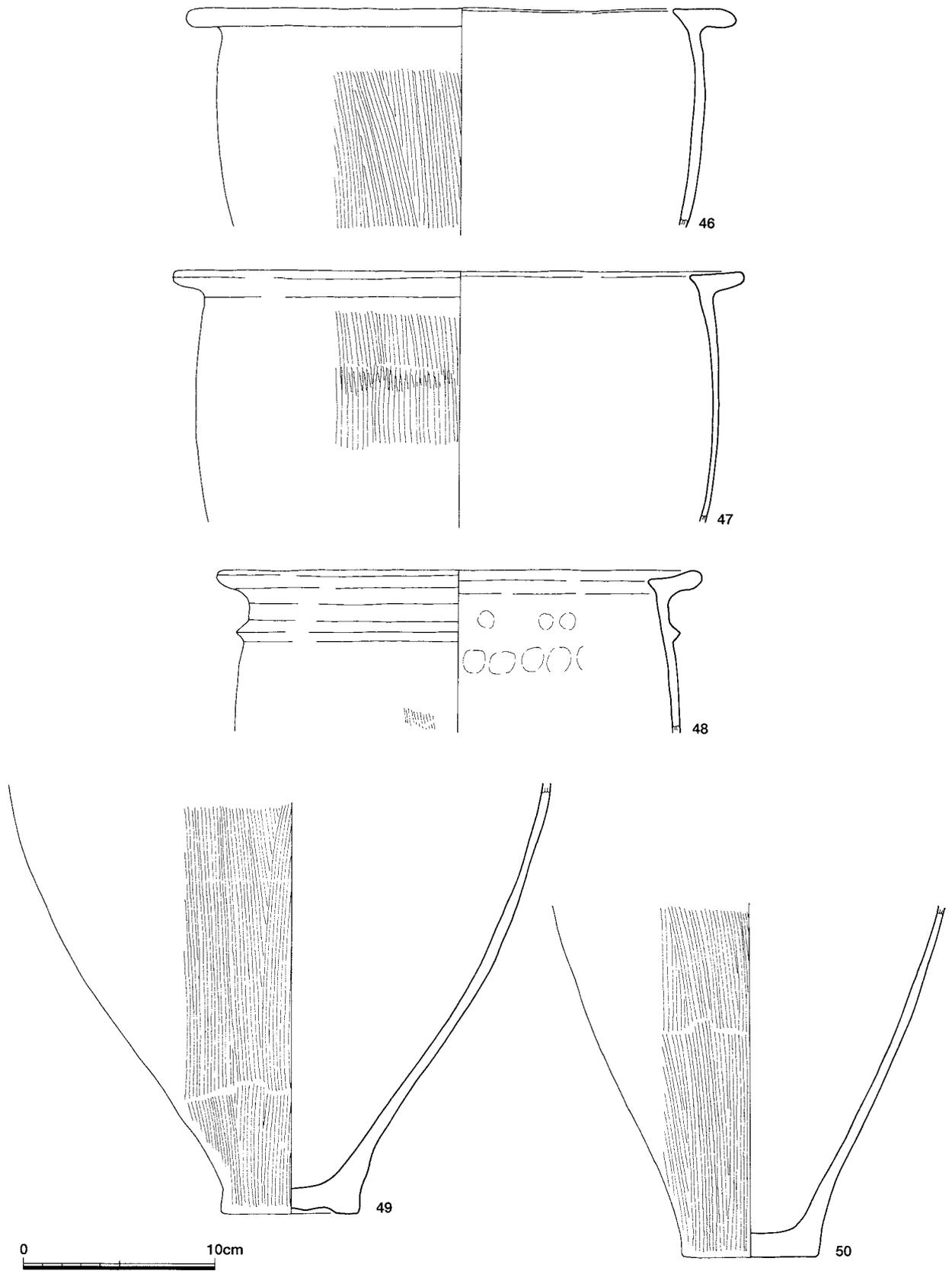


Fig. 16 SK-13出土遺物実測図1 (1/3)

**SK-11**

(Fig. 17)

平面形は台形、断面は皿形を呈する。覆土は暗灰色粘土で締まりがない。比較的最近の遺構とみられる。

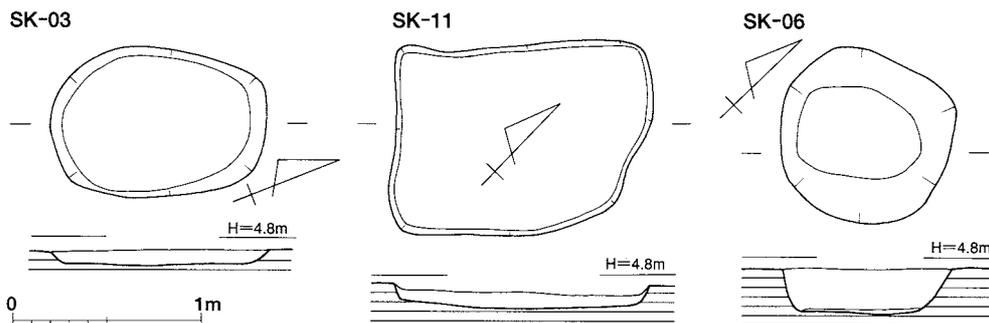


Fig. 17 SK-03・06・11遺構実測図 (1/40)

**SK-13** (Fig. 18) 調査区北西端で検出した土坑。平面形は長楕円形を呈する。全長2.9m、幅70cm、検出面からの深さは50cm。遺構の主軸はほぼ南北方向で、SD-10と平行する。断面は北から南に下る階段形を呈する。覆土は暗黒褐色粘土で、最下層から多数の土器が出土する。

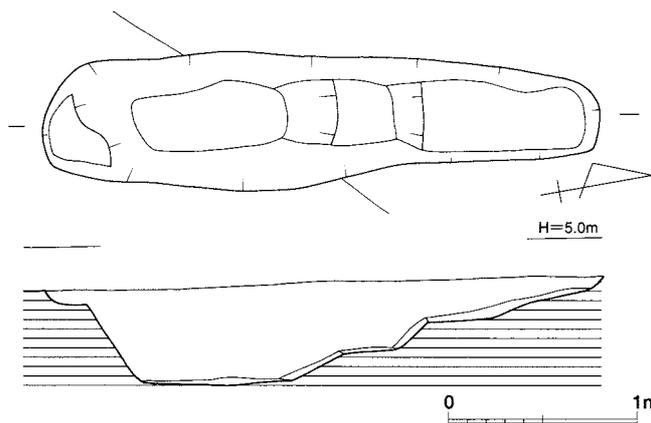


Fig. 18 SK-13遺構実測図 (1/40)

出土遺物 (Fig. 16・19) 46~51は甕。46は口縁上面は水平で外側に厚く張り出し、口縁内面は内側に突出し、胴部は上位でやや張り出す。47は口縁上面が内傾し、胴部は緩く張り出す。48は口縁が外径し、その直下に突帯をもつ。51は亀の甲タイプの甕で、断面三角形口縁と突帯をもち、細かい刻目を施す。弥生前期末の遺物で、混入品である。52

~55は器台。52・53は薄い器壁で外面は縦ハケ、口縁・脚部端部は横ナデて面を作る。54・55は指押サエ成形で作られ、器壁も厚く、粗製品である。

51を除いて、出土遺物は弥生時代中期後半のもので、遺構の時期も同時期であろう。

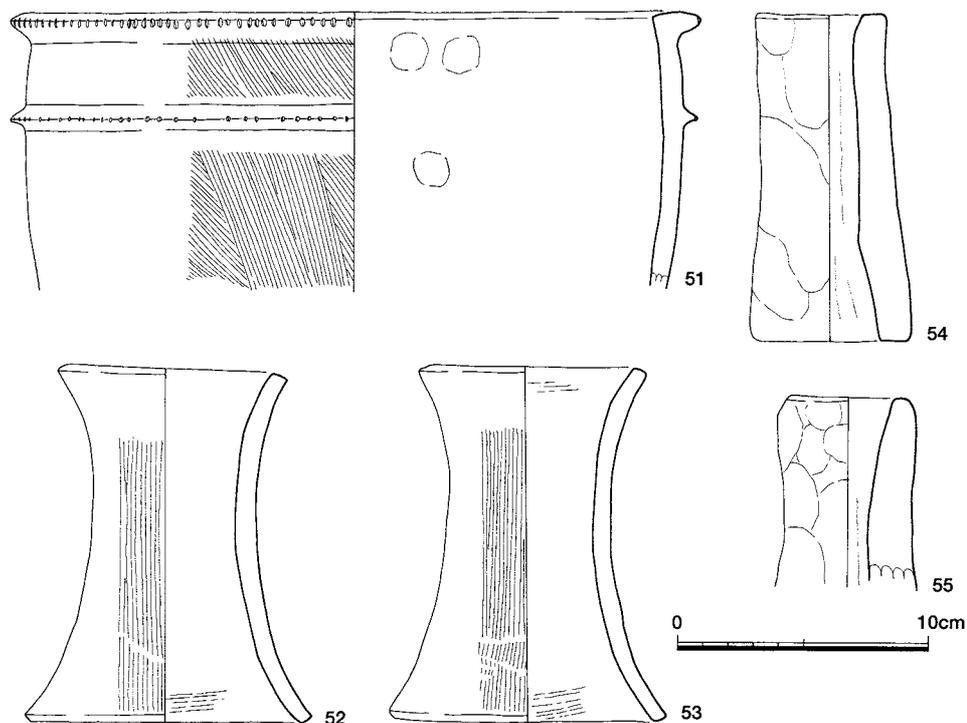


Fig. 19 SK-13出土遺物実測図2 (1/3)

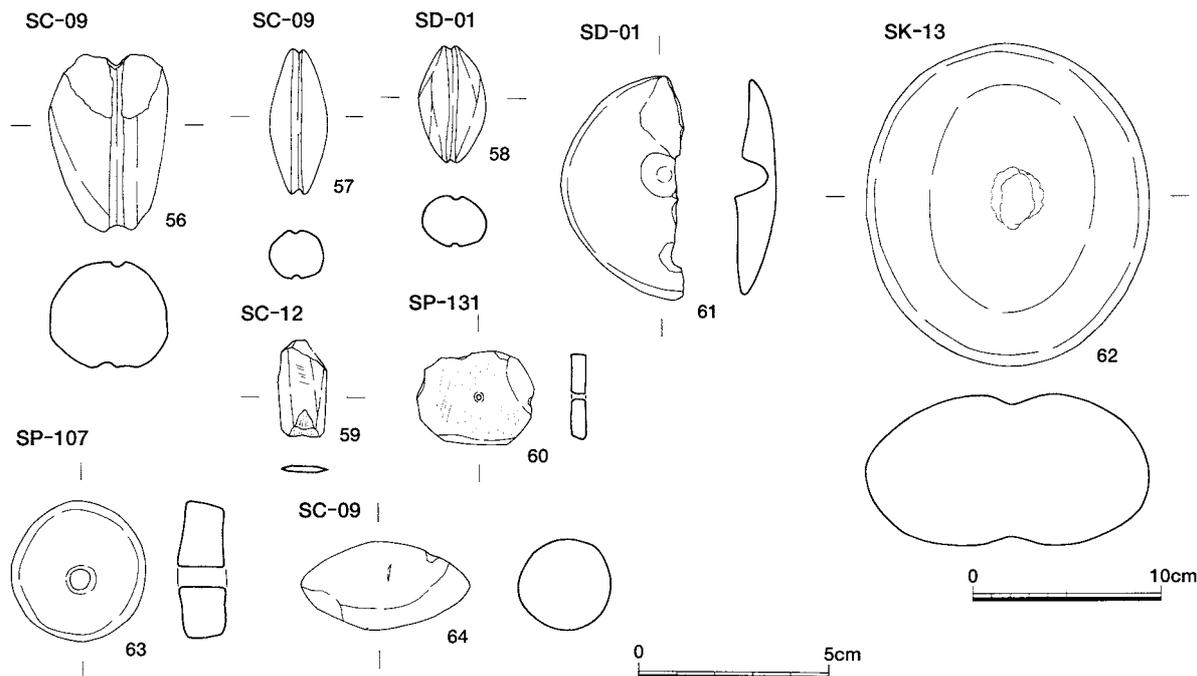


Fig. 20 石器・石製品・土製品実測図 (1/2・62は1/4)

(5) 石器・石製品・土製品 (Fig. 20)

各遺構で出土した石器・石製品・土製品をここでまとめて報告する。56～58は石錘。56・58は滑石製、57は頁岩製。56は一度破損した製品で溝を研ぎ直して再利用している。59は石鎌で、先端部を欠損する。頁岩製とみられる。60は滑石製有孔円板。側面は一部研磨して面取しており、表裏とも同じ方向に研磨する。古墳時代の製品。61は紡錘車未製品。両面とも研磨して整えているが、中央の穿孔は貫通していない。62は凹石で、かなりの重量がある。上下両面の中央に窪みがあり、他の部分に凹凸は見られない。63は土製紡錘車で、各面はナデて仕上げられ、中央の孔は直線的に空けられる。64は土弾。紡錘形で表面は非常に平滑で指圧痕もない。

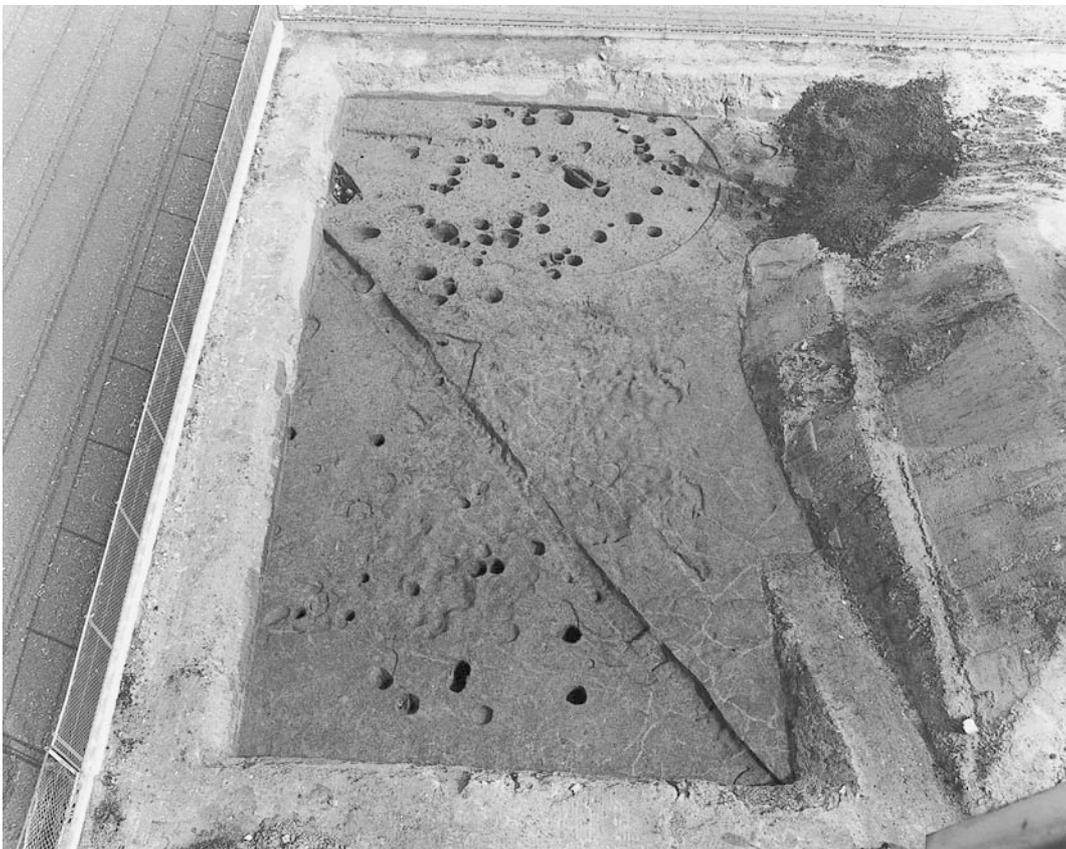
### 第3章 小 結

今回検出された弥生時代前期後半の住居群・貯蔵穴群は、比恵遺跡群の北側部分に分布する弥生時代前期の集落の一部を構成するとみられるものである。前期の集落の範囲はさらに北側の台地端部まで及んでいる。今回調査地点の近隣ではこれまで貯蔵穴群が南隣の30・37次調査や31次調査で検出されている。貯蔵穴の密度と位置をみると、今回の調査地点付近が貯蔵穴分布域の端部であろう。円形竪穴住居は貯蔵穴群の分布域とは重複せず、分布域を囲むように位置するように見える。住居は同一地点での建替えはみられるが切り合いは少なく、短期間に複数の住居が併存していたことが考えられる。また南隣の30次調査区北側の柱穴群は円形住居の痕跡である可能性が高くなった。

中期の土坑 SK-13は春日市立石遺跡などで類例がある大柱遺構に形状が似ており、同様の機能の小型の遺構であると推定される。また SD-01・04・10等の溝は周辺一帯を大規模に区画した溝の一部とみられるが、今後周辺の調査により、さらに具体的な様相が判明されることが望まれる。



(1) 調査区東半部全景 (南から)



(2) 調査区西半部全景 (南から)

図版 2



(1) SD-01 (東から)



(2) SD-02 (南から)



(3) SD-04 (東から)



(1) SD-04東壁土層 (西から)



(2) SC-09上層 (北東から)



(3) SC-09上層 (北西から)

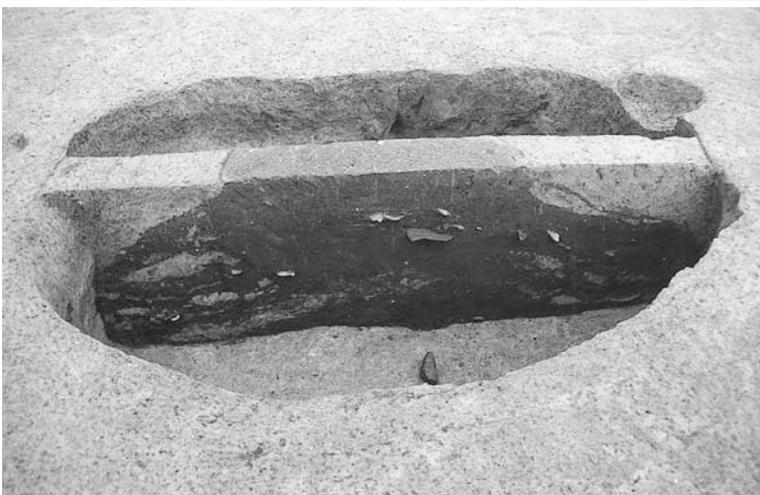
図版 4



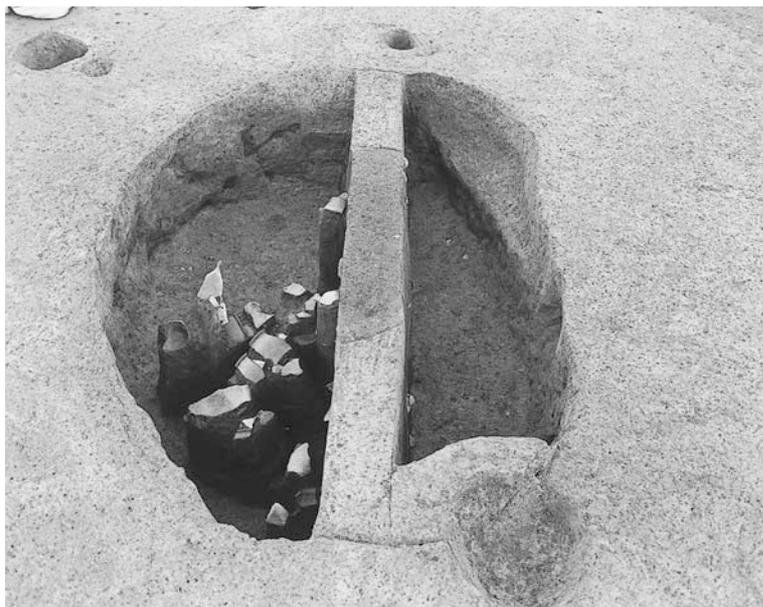
(1) SC-12 (南東から)



(2) SC-09下層・SC-14 (南西から)



(3) SK-05土層断面 (南から)



(1) SK-05遺物出土状況 (東から)



(2) SK-05完掘状況 (東から)

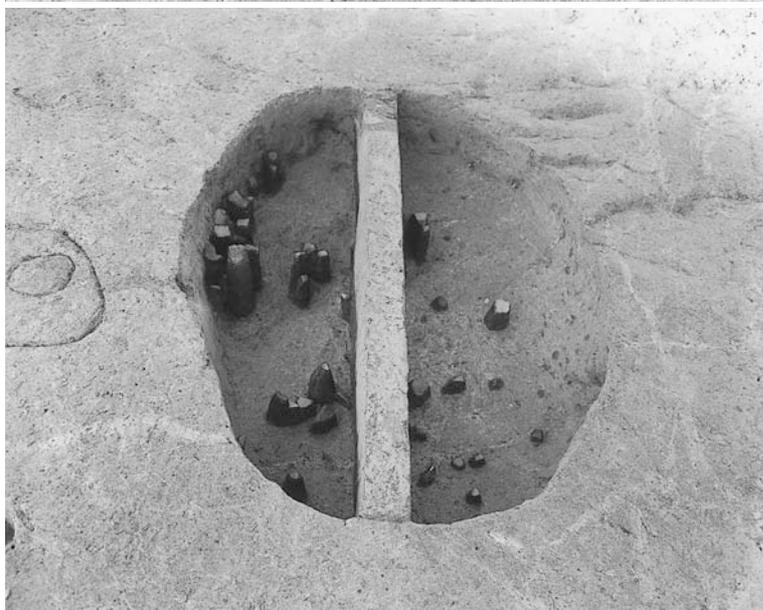


(3) SK-07土層断面 (南から)

図版 6



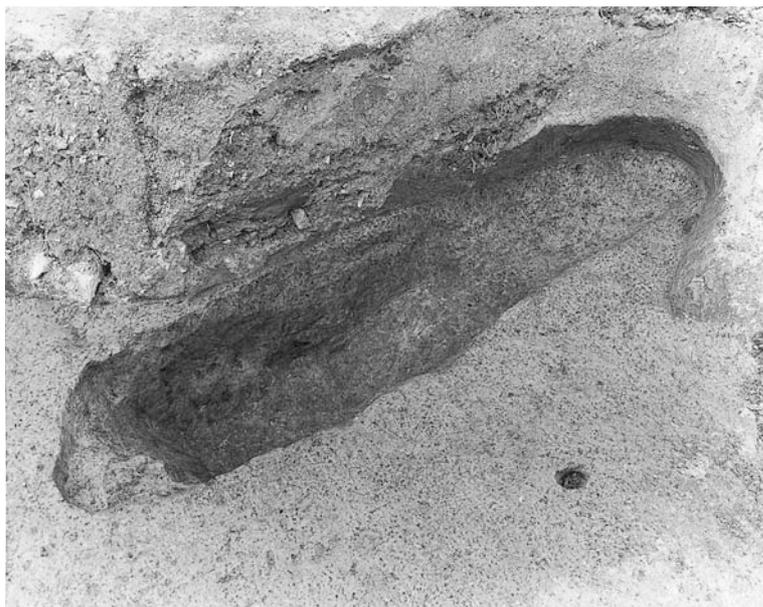
(1) SK-07遺物出土状況 (東から)



(2) SK-08遺物出土状況 (東から)



(3) SK-08土層断面 (南から)



(1) SK-13 (東から)



(2) SK-13遺物出土状況 (西から)



(3) SK-13土層断面 (東から)

图版 8



出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	ひえ41						
書名	比恵41						
副書名	比恵遺跡群第90次調査の概要						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第858集						
編著者名	大塚紀宜						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8-1						
発行年月日	平成17年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
ひえいせきぐん 比恵遺跡群	福岡市博多区博多駅 南4丁目222番	40132	020127	33°34'40"	130° 25'54"	2004.1.21 ~2004.3.5	332.1㎡
調査原因	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
共同住宅建築	集落	弥生時代・ 古墳時代	竪穴住居・貯蔵穴・ 溝状遺構・ピット	弥生土器・土師器・ 石器	弥生時代前期後半～ 中期後半の集落跡		

---

## 比恵41

2005年（平成17年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株富士印刷社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-45

---